

令和6年度 第12回白山市ミライ会議 【概要】

日 時 令和6年8月24日(土)10:00~11:00

場 所 鳥越コミュニティセンター

テーマ 【防災】 地域防災

出席者 10人〔河内、吉野谷、鳥越、尾口、白峰地区の地域コミュニティ組織の防災担当ほか〕



◆令和4年豪雨被害 市民からの被害状況等の情報を各部署に迅速に伝達する体制の整備を (出席者①)

一昨年8月4日の豪雨により、鳥越地区は大きな被害を受けました。その際、市の関係職員が迅速に動いてくれたことに感謝しています。しかし、市の担当者や県、国からの問い合わせに対して、状況の説明を毎日十数回繰り返さなければなりません。このようなことがないように、市から県や国に情報を効果的に伝える司令塔があったほうが良いと思います。市民からの情報を適切に管理し、各部署に迅速に伝達する体制を整備してほしいと思います。

(市長)

実際の経験から得た大切なお意見だと思います。能登半島から多くの方が避難してきた際には、様々な問い合わせに対応し、被災者にとっての負担を軽減するため、一元的に相談できる体制を整え、ワンストップで対応しました。防災庁舎が整備された際には、災害が発生した地域の町会長が何度も同じ説明を繰り返すことがないように、体制を整えたいと思います。

(出席者①)

河川の管理に関しても、管轄が国や県、市に分かれているために、時には「市の管轄ではないから、県の管轄ではないから」と対応を拒否されることがありました。行政の中で、市、県、国が連携し、市から県や国に働きかけてもらいたいと思います。

(市長)

災害が発生した時には、窓口をしっかりと作ることが必要だと思います。能登では、国が権限代行で、県の代わりに対応していて、様々な人材を集めて支援を行っています。

◆自分事としての防災対策 地区の特性に応じ訓練を工夫

(出席者②)

今年からまちづくり協議会に参加し、防災を担当として、自主防災組織を、自分主体でやらなければいけないと思っています。河内地区では地震や津波、火山噴火よりも大雨や土砂災害に備える必要があると考えています。白山市は海から山まであり、地域で災害の質や対応が異なりますが、山ろく地域は共通の課題を抱えています。高齢化が進む河内地区では自助が難しく、どこに誰がいるのか分からないので、共助の構築も課題です。私たちの地区では、自分事としての防災対策がこれから必要だと思います。

白山市では昔から雪害に対応し、道路整備や除雪は十分に行っていますが、それ以外にはどのような想定をされているのでしょうか。

(市長)

火山噴火については、白峰で毎年避難訓練を行っています。地域で防災組織を作ってもらっているのは、地域の特性に基づく課題を市に提起し、それに対する対策を考えることが重要であるからです。鶴来地区では、土砂災害の危険性から、建設業協会と鶴来支所が連携して、毎年ボランティア活動として土嚢の点検と作成を行い、災害時に迅速に土嚢を配布する体制を築いています。こうした自助努力を行う地域が増えていると感じています。高齢化や地域のつながりの希薄さが課題となる中、山ろく地域はお互いの顔が見える関係があると思いますが、距離がある場合どう対応するかを考える必要があります。避難行動の際には危険な場所を避ける必要があり、普段からの点検も必要です。そういった意味で、山ろく地域の地域コミュニティが集まり情報交換をしてもらえれば、より良い体制づくりにつながると思います。

(出席者③)

吉野谷地区では、地区の運動会の後にバーベキューをしたりしていますが、ただ集まってくださいと言っても、競技に参加していない人は集まりにくいので、集会所までの避難訓練に参加してくださいと呼びかけ、集まってもらい、バーベキューをしました。バーベキューは炊き出しの訓練にもなります。まずは、簡単なことからやってみてはどうでしょうか。その後、話を進めていけばいいと思います。避難する方法を考えることが大切だと思います。

◆令和4年の豪雨時 三坂町では住民同士が助け合い避難し、安否確認も手分けして迅速に

(市長)

一昨年8月4日の時、三坂町はどのような避難行動を取りましたか。

(出席者①)

朝方、激しい雨が降り、在所が水浸しになったため、住民に集会所へ来るよう呼びかけました。三坂町では、隣近所の顔が分かっているため、家から出られない一人暮らしの高齢者を若い人が背負って避難させました。町内の谷川にかかる4つの橋のうち3つが橋の上まで水があがっていたため、危険だと判断し、女性は男性が迎えに行き、手を引いて集会所まで避難させました。全部で約50人が集まり、顔の見えない人は知っている住民が安否確認を行い、遠方

にいる住民には危険を伝え、娘の家にいるように伝えたりしました。住民全員の安否確認は、手分けして迅速に行いました。

(市長)

三坂町は、1時間100mm以上に猛烈な雨が降り、小松川の中ノ峠一帯がひどかったです。

(出席者①)

鳥越城にある雨量計が 300 mm近くだったと後で聞きました。城山の杉が倒れ、別宮から小松への道も通ることができず、一時、孤立した状態でした。大日川の堤防が崩れ、水が入ったのも、後から知りました。人命第一で、被害のある場所を見に行かないよう指示していました。こうした訓練はしていなかったの、訓練は大事だと思います。先ほどの、訓練は簡単なことから始めるという意見はとても良いと思うので、参考にさせていただきます。

◆白峰地区で近年の多発する大雨による被害 防災組織を立ち上げ防災力強化

(市長)

その時は、私は教育委員会にいて、白峰小学校の職員に連絡し、状況を確認しました。学校の横を流れる川が堤防近くまで水位があがっていると聞き、すぐ旧庁舎に逃げるように指示したことを覚えています。この時、白峰地区の避難行動はどのようなものだったのですか。

(出席者④)

保育所は上の方にありますが、小学校は下の方にあり、白峰では川沿いの低く危ない場所に児童が集まる場所があることが、以前から問題になっていました。近年、大雨による被害が多いので、スムーズに対応できるようにしておかなければならないと思います。コミュニティセンターやまちづくり協議会ができ、防災組織を新しく立ち上げることになり、今度の火曜日に設立会を予定しています。次の水曜日には台風が接近するため、組織の対応力が試されることになります。

また、防災訓練を9月に行っていましたが、土砂災害の危険に備え、梅雨前に行うのがいいのではないかという意見も出ています。いつどこで災害が起こるか分からないので、意識づけるためにも、防災訓練は気軽に参加できるような形でできたらいいと、サービスセンターとも意見交換しながら進めていきたいと思っています。

◆山ろく各地で想定される孤立化の危険

(出席者④)

以前、東二口で国道の法面が崩れた時も、金沢方面が通行止めになり、福井回りでしか行けず、孤立化したことがあります。迂回は時間も距離もかかるので、白峰は孤立するケースが想定されます。その時は、緊急車両も通れず、当時の区長が、直接、上とかけあったりしていたと聞いています。

(市長)

西山の白木峠の林道が繋がれば、別のルートも考えられます。尾口も、ホワイトロードに行く道が何回か崩れて通行止めになっています。

(出席者⑤)

一昨年の8月4日の豪雨の時、私はアルバイトでホワイトロードにパトロールに行っていました。町会長をしていて、帰ってきてと連絡があったけれど、土砂降りで倒木もあり、道が通れませんでした。最終的に、ホワイトロードを岐阜県側に抜け、富山県を經由して、帰宅しました。

(市長)

現在、白山ろくで土砂災害が発生すると、他県を經由しなければならない可能性が高いです。林道やトンネルなど、インフラ整備も必要ですが、すぐに実現することは厳しい状況です。河内地域も、一度土砂崩れが発生すると孤立しやすい場所だと思います。

(出席者②)

ダムへ向かうトンネル道でダンプカーが事故を起こし、通行できなくなったことがありました。その時は対岸の道路が利用できましたが、現在はその道路の整備がほとんど行われていないため、一つの道路が遮断されると、同様の状況になると思います。

(市長)

道が寸断された場合、ヘリをどこに下ろすか、どうやって避難するか考えなくてはなりません。市としては、大きな災害が発生した場合、自衛隊の派遣を要請します。防災庁舎ができれば、災害対策を一元的に行うことが可能になります。

(出席者⑤)

先ほども言いましたが、ホワイトロードが寸断され孤立化した時は、自衛隊がくるということで、人を集めたり車の移動を指示したり、動き回りました。

そういう経験を踏まえ、4月にコミュニティセンター長となりましたが、山ろく地域の人は防災意識が低いように感じます。今年は、白峰・尾口・吉野谷地区が合同で、11月30日に白嶺小学校で、防災セミナーを行う予定です。それに先立って、10月10日に各集会所に一時避難所として集まり、危機管理課の職員に話をしてもらう催しを計画しています。区長会や老人会の協力を得て、高齢者に集まってもらうことを優先し、意識づけをしていきたいと思っています。また、各集落から水などの寄付を募り、足りない物資については区長と相談しながら、集会場に食料を配置することを提案していきたいと考えています。

一次避難や二次避難を考えると、二次避難所として指定されている白嶺小中学校の体育館や一里野の北竜会館には冷暖房が設置されていません。一里野の場合、冬場は観光客も避難させなくてはなりません。冷暖房の整備をお願いしたいと思います。

◆**地域の人を巻き込んだ防災訓練 若い人や体の弱い高齢者の参加を促すには**

(出席者⑥)

今年5月に、三ツ屋野地区で危機管理課と防災訓練を行いました。参加者は歩ける人や地区の青年団、婦人会の役員に限られ、若い人や体が弱い高齢者は参加しない傾向にありました。避難訓練をしたらいいとは言いますが、実際に地区で訓練が実施できるか不安でした。先ほどの三坂町の話聞いて、災害時にお年寄りを若い人が背負って避難したとか、男性が女性を迎えに行ったとか、本当に素敵な話だと思いましたが、実際にそのような状況にならないと難しいことなのかもと思います。改めて、地域の人々を巻き込んで防災訓練を進めることの難しさを感じています。

◆**地域のつながりを強化し、高齢者など声を上げない人も巻き込んだ対策を**

(出席者⑦)

会社に関係しているNPOの一員として、能登島で支援を行っています。能登島は、七尾市の中でも行政の手が行き届かない地域で、NPOが現地のニーズを聞き取るなどして対応しています。地震などの災害時には、全域が影響を受けるため、行政だけでは手が足りません。地域住民自身が防災組織などの体制をつくり、自分たちで守らなければならないと思っておいたほうがいいのではないかと思います。山ろくは地域のつながりが強いと言われますが、すべての人の顔が分かっているわけではありません。能登島では、寺の人が地域の世話役を担い、地域のすべてを理解していて、我々にも今日はあそこに行ってくださいと指示を出してきます。

高齢者は支援を遠慮して、声を上げない人が多いのが現状です。そんな人に対しては、積極的に引き込む力技も必要だと思います。地域のつながりの強さをもう1つ2つあげて、行政の支援はしばらく期待できないという前提での取り組みが必要だと思います。

(出席者⑧)

私たちの集落も小規模だが、そういったところが山ろく地区全部にあります。そこで想定されるのは孤立の問題で、二次避難所への移動を考える時に道路がどうなっているかなどの情報がありません。危ないと分かれば、避難しないと思います。情報が全く取れない状況では、自らの判断で避難行動を取らざるを得なくなります。電話が使える環境であれば、サービスセンターや市に相談できる可能性はありますが、それでも道路状況などの詳細は不明なままです。そうすると、避難せずに集落内の安全な場所に集まるという選択肢しか考えられなくなります。

(市長)

三坂町の例を参考に、どうしても避難できない状況が生じた際には、集まる場所を決めておくのも良いと思います。そのためには、家庭でも備蓄し、互いに物資を持ち寄ることも必要です。また、顔と名前を知っていることも大切です。

◆山ろく地域で共通する課題 意見交流でノウハウ等を共有し、コミュニティの再構築を

以前、町会長をしていた時は、自分の地区だけは顔と名前を把握していました。現在は、新しくできた団地もあり、誰がいるのか分かりません。個人情報把握したくても、行政は名簿を出せないで、自分たちで調べるしかありません。地区での高齢化が進行し、家数が少ない場所では活動が困難であるため、河内全体で取り組みたいと思っています。

山ろく地域は抱える課題は共通しているため、そうしたノウハウなど、センター長も含めて意見交流などを行いたいと考えています。また、高齢者や参加しなかった人々の意識を変えるためには、上からの指示ではなく、隣人同士のつながりが重要だと思います。合併から20年が経過し、コミュニティの再構築が山ろく5地区全体で必要だと思います。

(市長)

地域の様々な防災に関する情報を聞いて、その地域にあった防災を考える必要があります。市は防災庁舎を整備し、防災への取り組みを進めていきたいと思っています。今後も、地区の話を聞かせていただきたいと思っています。